

2026年

風 光 れ

人権のたより

通算第87号 1月 9日発行

三重県立津東高等学校

新しい年が明けました。三学期のスタートです。有意義な冬休みを過ごせたでしょうか。三年生の皆さん、ラストスパートです。

○ 「丙午」 ～～根拠のない「迷信」とどう向き合いますか。～～

今年、令和8年は「丙午」。そして60年前の昭和41年も丙午でした。この年の出生率は1.58。前年の昭和40年、翌年の昭和42年の出生率はそれぞれ2.14と2.23となっています。（厚生労働省 出生数、合計特殊出生率の推移より）この数値から前回の丙午の年には意図的に子供を産まなかったということがわかります。この原因は「丙午生まれの女性は気性が激しく夫を不幸にする」という迷信（これは江戸時代の創作話の「八百屋お七」が原典であるといわれています。）と、さらにマスコミがこの迷信を報道したことによると考えられています。もちろん、昭和41年生まれて今年還暦を迎える方々が、他の年に生まれた方に比べて、不幸な人が多いとか、犯罪率が高いなどというデータはありません。

さて、前回の「丙午」の年よりも多くの情報を得られるようになり、迷信は迷信と判断しやすくなっている今年の「丙午」。はたして出生率はどのようになるのでしょうか。

○ 「吉継、はやく椀を回せ」

1月の最終日曜日（2026年は1月25日）は世界ハンセン病の日。そして若くしてその病に侵された戦国武将として有名なのが大谷吉継です。

慶長5年、徳川家康を討たんとする石田三成に3度にわたって「無謀であり、勝機なし」と吉継は説得しました。最終的に三成の固い決意を知り、またその熱意にうたれ、敗戦を予測しながらも勝利に向けてさまざまな手を尽くして息子達と共に三成の下に馳せ参じました。

そして、天下分け目の「関ヶ原の戦い」。西軍に与した彼は小早川秀秋の東軍への寝返りにより敗北し、その命を落とすことになりました。享年36（42説もあり）。

なぜ彼は、自ら勝機の少ないと判断したこの戦に参加したのでしょうか。彼の本当の心情を現在では知ることはできませんが、それにかかわるような話が伝わっています。

それは、「関ヶ原の戦い」の13年前の天正15年、大阪城にて秀吉が豊臣家家臣を集めて開いた茶会でのことです。その席で招かれた家臣たちは一杯のお茶を回し飲みするものの、吉継が口をつけた茶碗は病の感染を恐れて誰も飲みたがりません。その中で三成は「吉継、私は喉が渴いた。はやく椀を回せ。」という、そのお茶を何の躊躇もなく一気に飲み干し、さらに吉継の病には一切触れず、主君である秀吉に「おいしかったので飲み干してしまいました。もう一服、点てていただきたい」と言ったといいます。そして、三成はその後も普段と変わることなく吉継と接しました。江戸時代の創作ともいわれるこの話、関ヶ原の戦いともあわせて皆さんはどのように感じられるのでしょうか。



東京都立中央図書館蔵  
「太平記英勇伝」七十九「大谷刑部少輔吉継」  
山今亭有人記 一惠齋芳幾筆